

## 福井城本丸指図の年代について

—文政から嘉永期まで—

国 京 克 巳

### 一、はじめに

福井城の本丸建物については、福井県立図書館に保管されている松平宗紀氏蔵の松平文庫にある指図が知られている。この指図は立面図が合わせて描かれる天守の指図を別として、残りの指図は配置図を兼ねた平面図がほとんどである。これらの本丸指図についての論考は、松岡利郎氏の論考<sup>1)</sup>や松平文庫の資料整時につくられた『松平文庫福井藩史料目録』<sup>2)</sup>の解題、福井城本丸図などを集めた『城郭・侍屋敷古図集成 福井城・金沢城』<sup>3)</sup>がある。『松平文庫福井藩史料目録』は細かな論考によつて年代を確定したのではなく、指図表題の年号を元に、指図に描かれる建物の有無と福井藩の史料<sup>4)</sup>にあらわれる建物の比較によつ

て年代の推定をしたものである。『城郭・侍屋敷古図集成 福井城・金沢城』は本丸指図の紹介と、天守や、本丸建物の遺構である瑞源寺の本堂・書院を論じたものである。松岡利郎氏の論考が唯一各指図間の相互分析を重ね、本丸建物指図の時代判別を行なったものである。このことにより福井城の本丸建物指図の年代は現在のところ、この松岡氏の指図によつているところが大とみられる。しかし、特徴のみられない指図については年代確定や推定がなされていない。また、松岡利郎氏と『松平文庫福井藩史料目録』によつて、これから指図が計画図あるいは実際に建てられた図、さらにそれら建物に変更を計画した図あるいは変更された図とされるが、それらが実際にそのとおりであったか検証された論考はみあたらない。

ところが先頃、福井城本丸の御小座敷と大奥御座之間がそれぞれ移築され建物で、福井県指定有形文化財である瑞源寺本堂と書院の修復工事がなされた<sup>5)</sup>。この修復工事にともない本堂の解体調査や書院の修復調査が実施され、本堂・書院の履歴に関する多くの新たな

知見が得られた。本稿は、これらの新たな知見にもとづく論考によつて、江戸時代後期の福井城本丸の様子を描いた指図の信憑性を検討し、その年代を確定あるいは推定することを目的とする。まず最初に、瑞源寺の本堂・書院の修復工事から得られた本丸の御小座敷と大奥御座之間を、年代が表記されている本丸指図の御小座敷・大奥御座之間と比較し、その図面の信憑性を検討し、表題の年代を確定する。その後、確定された図を基準に、その近時に描かれた指図数点の年代の推定、さらにはその指図が実施図かあるいは計画図であるかの推定を試みるものである。以下で使用する松平文庫の本丸指図は「福井城本丸御建物図 文政六」（二三七〇）、「御本丸御絵図」（二三六二）、「御本丸指図 文政十三年」（二三六三）、「御本丸御絵図 御用部屋 御奥之間」（二三六六）、「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」（二三六四）、「御本丸御殿ノ図」（二三七一）、「越前福井 御本丸御建物図」（二三七二）、「御本丸御絵図 嘉永元年」（二三六五）の八点である。本丸指図には掛紙が張り付けられた指図が多数あり、その有無によつて図面年代が異なるものもあ

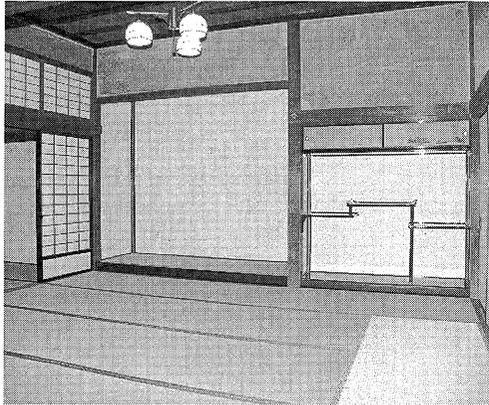


図2 瑞源寺書院 (修復後内部)

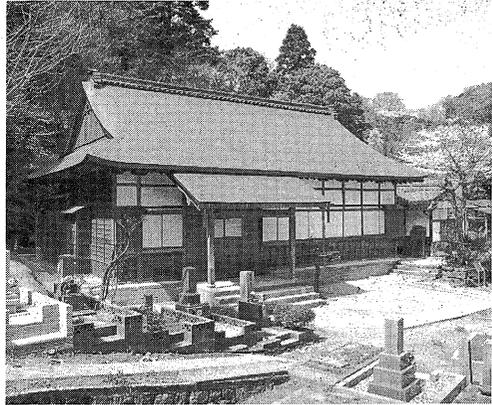


図1 瑞源寺本堂 (修復後外観)

るので、掛紙の意味を合わせて検討する。掛紙は図面の数ヶ所に張り付けられるので、上下関係や紙質・図法で同時期と判断されるものはそれぞれ上掛紙・下掛紙とした。不明なものは単なる掛紙とした。

## 二、瑞源寺と本丸建物

瑞源寺は福井藩松平家の菩提寺の一つで、臨済宗妙心寺派の寺である。泰澄大師によって天平宝字二年（七五八）に創立されと伝えられ、その後衰退したため延宝元年（一六七三）に福井藩の菩提寺の一つである華藏寺の住職太随和尚が吉江（鯖江市吉江町）に小庵を建てて、瑞源寺を再興したのをはじまりとする。吉江は、第四代福井藩主松平光通の弟昌親が二万五千石を譲り受けてできた吉江藩の中心地である。同年昌親の母高照院が死去し、同寺に位牌が納められた。延宝二年に、昌親が第五代福井藩主として福井に移ることになると、瑞源寺も小山谷に寺地を与えられて移転している。その後、昌親は隠居したが、貞享三年（一六八六）に再び七代藩主吉品（当初は昌明）となり、正徳元年（一七一一）

に死去し、当寺に埋葬された。

本堂は、正面八間半（二五・九一m）奥行五間（九・四九m）の入母屋造り棧瓦葺（修復後は銅板葺）の建物で、前面に二間の向拝と、背後に半間の屋根を葺きおろしている（図1）。この建物は文政十三年すなわち天保元年（一八三〇）に福井城本丸に御小座敷として建てられた建物を、万延元年（一八六〇）に移築して本堂としたものである。書院は天保十五年すなわち弘化元年（一八四四）の瑞源寺火災後から嘉永元年（一八四八）までに、本丸の大奥御座之間の主要な部分が移築されたものである。建物は桁行四間、梁間三間の切妻造り棧瓦葺で、北面に戦後増築された幅約一間の下屋、南面に幅三尺強の棧瓦葺下屋、西面に幅三尺の棧瓦葺の土庇下屋をもっている（図2）。

御小座敷と大奥御座之間が移築された理由は、文化十年（一八一三）の火災で瑞源寺の本堂をはじめとした諸建物が焼失した。その後、御像堂・書院・庫裏は再建されたが、本堂は今だ再建されないままであった。ところが、弘化元年（天保十五年）に再び火災にあ

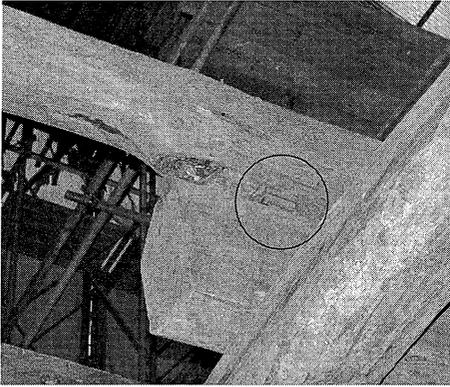


図4 下間小屋裏の梁下端の柱枘穴  
(○印内)

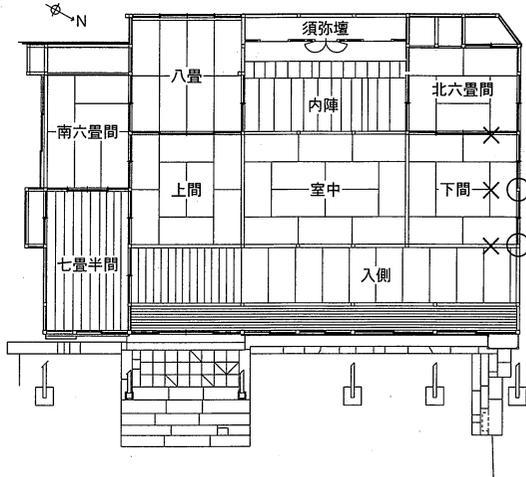
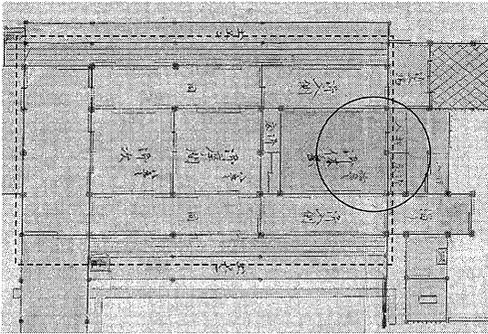
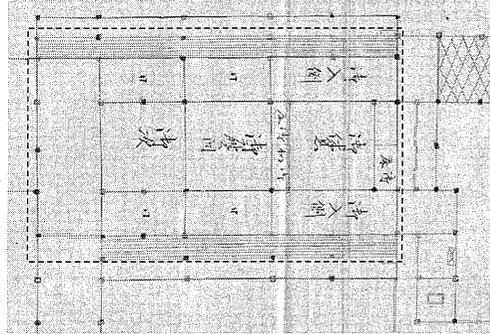


図3 瑞源寺本堂平面図(修理前)  
○印は床框・落し掛け痕跡のある柱 ×印は梁下の柱枘穴位置



○ 改造された御休息部分

図6 「御本丸御殿ノ図」(1371)の御小座敷部分



□ 本堂移築部分

図5 「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(1364)の御小座敷部分

い、再建されていた御像堂・書院・庫裏も焼失してしまった。このため、仮住居の再建がなされ、まず書院として嘉永元年までに本丸大奥御座之間が移築された。

本堂については、万延元年が吉品公の百五十回忌にあたるため瑞源寺は度々仮御堂の新築を福井藩に願ひ出ていたが、当時の福井藩の財政事情等から難しく返答がなかった。ところが、万延元年五月五日に福井藩から不用になった本丸建物の御小座敷を寄付することとなった。移築工事は五月初旬からはじめられ、七月に上棟されているので約三ヶ月程の突貫工事であった。

### 三、本堂にのこる御小座敷の改築痕

今回の本堂修復工事で、本堂の平面は御小座敷の主屋部分を移築し、禅宗寺院本堂の平面とするために、柱位置や間仕切位置を変更あるいは追加していることが判明した(図3)。また、外観も本堂とするために外壁回りに柱・窓・壁などを追加していた。しかし、主屋の主体構造となる桁や梁、小屋組、さらに本堂

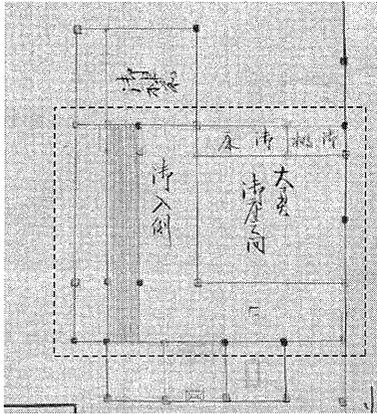


図8 「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」  
(1364)の大奥御座之間部分

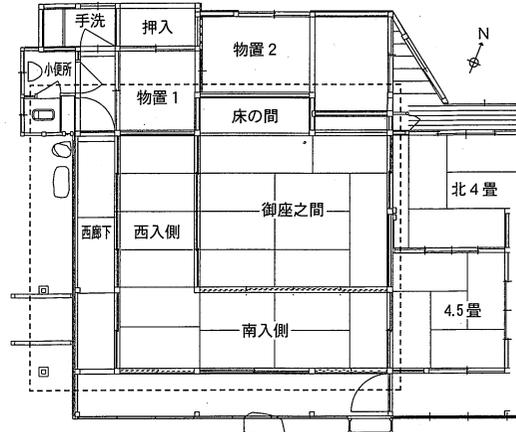


図7 書院平面図(修理前)

の南北妻側の柱は、改変されずに御小座敷の建物そのものの状態で移築され、利用された。<sup>13)</sup>ところが、改変されていないはずの一部の小屋組に御小座敷において改造された痕跡が発見された。それは本堂の下間(八畳)の小屋裏にある梁下端に、以前には柱が半間室内側にあつたとみられる痕跡が認められたことである。本堂の梁組は基本的に幅二間の上間・室中・下間の柱を柱頭でつなく桁梁の下層梁組と、その上部で梁間方向に建物の軒桁から軒桁までを架け渡す上層梁組で構成される。この下層梁組と上層梁組は相互の関係があまりなく、分離している。この梁組の北妻側で、上層梁と下層梁が上下に近接して不自然な架構を見せる箇所がみられた。この部分の下層梁上に後から梁を挿入したためとみられる横じりの梁仕口がみられた。さらに上層梁の下面に使用されない柱柄穴が入側と下間の境、下間中央、下間と北六畳間の三ヶ所にみられた(図4)。これら梁下の痕跡は下間の妻側から室内側へ半間入った所にある柱を抜き取ったためにのこった痕とみられる。また、下間の北妻側外壁にある南寄り二本の柱

には、それぞれが対応する床框や落し掛けの仕口痕跡が発見された。この床の間の痕跡は本堂時代のものではなく、本堂以前の建物つまり御小座敷時代のものだと判断された。

一方、瑞源寺書院は、明治二十四年(一八九一)の濃尾地震によって棟続きで建てられていた庫裏が倒壊しており、どの部分まで本丸から移築されていたかは明らかではなかった。しかし、現在残る書院の南下屋、瑞源寺に大奥御座之間が移築された時に増築された部分であることが修復調査により明らかとなり、書院の主屋と西下屋は大奥御座之間の移築部分であることが確認された(図7)。また、書院の主屋と西下屋の各部材は、本丸大奥御座之間以前の西三ノ丸御座所の部材が使われているものがあるという以外に、本堂の下間にみられたような本丸時代に改造された痕跡はみられなかった。

#### 四、本丸指図と本堂・書院

ところで、松平文庫の本丸指図には藩主住居が西三ノ丸御座所から本丸に移徙した文政十三年(天保元年)後の様子を描いた指図が

ある<sup>14</sup>。それは、「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)で、天保二年に完成した本丸の様子を描いているという<sup>15</sup>。この図には本堂前身建物の御小座敷が完成した当時の様子で描かれている(図5)。御小座敷は本丸の北側で、天守台跡の南東に位置する。御小座敷の主屋の桁方向は東西方向に配置される。本堂の下間にあたる部屋は御休息で、八畳の大きさとなり、その東に床の間と押入を設けている。これでは本堂の下間と御小座敷の御休息は大きさが一致しない。ところが天保二年以降に本丸を増改築した図とされる「御本丸御殿ノ図」(二三七一)では、御休息は東側に半間拡張して十畳となり、それにもない床の間・押入が半間東に移動し、主屋から飛び出している(図6)。この平面は本堂北妻側の柱に残る床框や落し掛けの痕跡と一致することになる。また、床の間・押入が主屋から飛び出す前は主屋の半間室内側に床の間・押入の柱が立つことになり、本堂小屋裏に残る痕跡とも一致する。

一方、「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)および「御本丸御殿ノ図」(二三

七二)の大奥御座之間の平面は、瑞源寺書院の主屋と西下屋部分の平面とまったく一致している(図8)。

以上から文政十三年に建てられた本丸の御小座敷の御休息は、八畳間から十畳間へと大きくするために床の間・押入を東に半間移動して造られたことがわかり、合わせて「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)は藩主移徙直後の図、「御本丸御殿ノ図」(二三七一)はその後に改造された図で、いずれの図も実際に施工された図面としてよいと判断できる。また、大奥御座之間の平面からみても、両図が同じ平面であることから、大奥御座之間は本丸では建物が改造が加えられなかったとい

う修復調査とも一致し、前述の両図が実際の様子を示しているという結論と一致する。

##### 五、本丸指図の検討

以下では前項の瑞源寺の本堂・書院と、本丸指図である「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)と「御本丸御殿ノ図」(二三七一)の検討で得られた結果を年代指標の基準として、その他の本丸指図を詳細に検討する。これに先立ち、本丸内建物の建築時期について確認しておく。本丸御殿の表である大広間とその東に続く諸建物や台所、中奥となる鉄炮之間と韃靼之間とその東に続く諸建物、奥となる焼火御間とそれにつづく藩主住居等

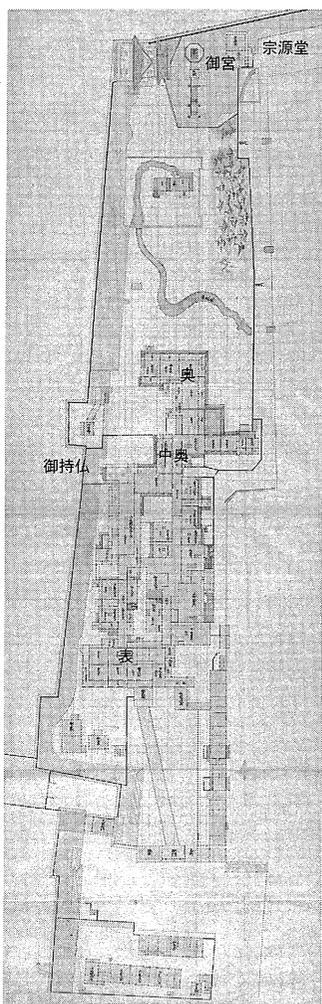


図9 「御座所絵図」文政年間(1383)

は、増改築は別として寛文九（一六六九）年の大火後に再建され、火災にもあわずに文政十三年の藩主住居の本丸への移徙までほぼ存在したことは周知のことである。一方、文政年間の「御座所絵図」によれば<sup>16</sup>（図9）、文政十三年まで藩主住居であつた西三ノ丸御座所には、藩主住居の建物のほかに、北庭に御宮・拝殿・鳥居、宗源堂と御供所、敷地西側の石垣上に二間四方の御持仏（御佛殿）が建てられていた。さらに三ノ丸御座所は本丸に取つて変わり藩政の中心施設として機能していたため、大広間をはじめとする表向きの諸建物、台所向建物、鉄炮の間をはじめとする中奥の諸建物が建てられていた<sup>17</sup>。これらの建物が本丸への藩主移徙にともない、本丸に移築あるいは再建・増築されている。その後、天保十四年再び藩主住居が西三ノ丸御座所に移され、前述の御宮をはじめとする諸建物、藩主住居、藩政の中心施設が移築あるいは建てられている<sup>18</sup>。このことを念頭に本丸指図を検討する。

（1）「福井城本丸御建物図」（二三七〇）図10  
表題の文字は直接図面に書かれる。また、図面の中折れ部にも「福居城御本丸図」と書いた紙を整理番号とともに張り付けている。本図は三分計の朱罫線を石垣内の本丸内すべてにひき、建物・塀・石垣などを描いている。建物は黄、縁板・囲炉裏・石垣部分・井戸などを薄茶とする。一部に水路とみられる部分を薄青の切り紙を張り付ける。他の指図と異なり、御本城橋と御廊下橋を詳細に描いていることが注目される。表題に「文政六癸未歳六月吉日改正」とある。「御本丸御絵図」（二三六二）の掛紙をとつた図にほぼ近い平面である。大きく異なる部分は、本図には御小姓部屋<sup>19</sup>の東に湯殿・釜屋などが設けられ、奥の藩主住居（以下、奥御座敷と記す）の御次之間・二之間の東に渡廊下が矩折れに延びて、湯殿に達していることである。「御本丸御絵図」（二三六二）では、この湯殿や釜屋はなく、御場り場とその南に続く九畳が幅一間半の廊下状の平面となり、湯殿関係の建物はみられない。この部分は年代の指標となる「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」（二三六四）では増築建

物が多く、改造された建物もたくさんあり、いずれの図面が古い状態を示すかわからない。一方、本図では中奥の御鉄炮之間・時計之間の西に便所がつくられ、台所回りでは縁側が多く記入され、南東隅に下台所が大きく建てられている。ところが、「御本丸御絵図」（二三六二）では下台所が非常に小さくなり、部屋名は異なっている。しかし、この様子は「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」（二三六四）と同じである。また、北不明門の西側で天守台跡より東に延びる石垣（がんぎ）に取付く登り塀と門の配置は、「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」（二三六四）と「御本丸御絵図」（二三六二）が一致しており、本図にはその部分が見当たらない。このことから本図は、文政六年の本丸建物の様子を示すとみられる「御本丸御絵図」（二三六二）以前の状態を示すものとみられる。

（2）「御本丸御絵図」（文政六癸未歳六月吉日改正）（二三六二）図11  
表題の文字は図面を折りたたんだ面にその大ききの別紙を張り付け、書かれる。表題の

紙は本図の紙の張り合わせ部が外れたものを修理した時に張り付けられたもので、図面の表に表題の紙が一部糊付けされている。本図は五分計の篋引きの上に朱罫線がひかれ、建物は柱や建具まで描かれる。建物は黄、塀は黒、水路を紺と色分けされる。掛紙も五分計の篋引きに朱罫線引で、建物の平面が描かれる。

掛紙で追加された建物は御宮・同拜殿・鳥居、宗源堂・御供所稽古所、射小屋、御佛殿、中之口および表小姓の二階に徒頭をはじめとする諸部屋、台所の二階に御腰物部屋・表納戸、近習部屋である。しかし、御小座敷、大奥御座之間、長局などは見当たらない。『松平文庫福井藩史料目録』では、御本丸住居普請前、即ち文政六年改正の図で、掛紙によって本丸増築計画部分を加えてあるとあり、文政十三年本丸住居造営前の図とする。掛紙を外した本図は前述のように「福井城本丸御建物図」(二三七〇)にほぼ等しく、表題の文政六年六月の図とみられ、その図の上に計画した建物を掛紙で張り付けたものとみられる。このことから、中之口および表小姓の二階、台

所の二階も計画図であるとみられる。この二階部分の計画は後述の「越前福井御本丸御建物図」(二三七二)の掛紙による二階の平面と一致している。この掛紙で計画された建物(御宮・宗源堂・御佛殿など)は、「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)と一致している。

しかし、移転の主要建物となる御小座敷・大奥御座之間・大奥長局さらには釜屋などは見当たらない。御小座敷などが建てられた場所には掛紙の糊付け跡も確認されない<sup>⑩</sup>。この場所の北東にある石垣(がんぎ)に登り塀と門が描かれ、それより南は空白であるから、御小座敷などは別の図面に計画されたのではないかと考えられる。以上から文政六年六月当時の図面に文政十三年の御座所移転の一部建物を張り付けた計画図とみられる。

### (3) 「越前福井御本丸御建物図」(二三七二)

図12

本図は表題の文字と整理番号を張り付けた厚紙を図面の表裏に張り付けている。表題の紙は金を散らした和紙で、整理番号には印が

押ししてあるが詳細は不明である。本図は画面全体にわたって三分五厘計の朱罫線を引き、その上から建物や塀・井戸などを描く。建物は一部を除き、単線で平面を描き、やや茶がかつた黄で塗る。掛紙を三枚張り付け、二階部分の平面をそれぞれ描く。掛紙も三分五厘計の朱罫線を描き、建物は単線のみで、色付けはなされない。本図・掛紙ともに他指図のように長い間使用された形跡はみあたらず、図面の傷みは非常に少ない。

『松平文庫福井藩史料目録』では、大奥関係の諸建物が描かれていないこと(取り払われたと推定)から、第十六代藩主慶永が再び住居した西三ノ丸御座所の建物が完成した天保十四年直後の図とするが、以下の点で疑問がもたれる。「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)と「御本丸御絵図」(二三六二)にみえる中奥の鞆鞆之間北西隅にある数寄屋四畳半が見当たらない。天保十四年とするなら奥御小座敷の御休息が八畳ではなく、十畳となっているはずである。また、御小座敷の御休息の東部分に小さな部屋の間仕切・石敷きの土間・廁の便器の下書き線が薄く見

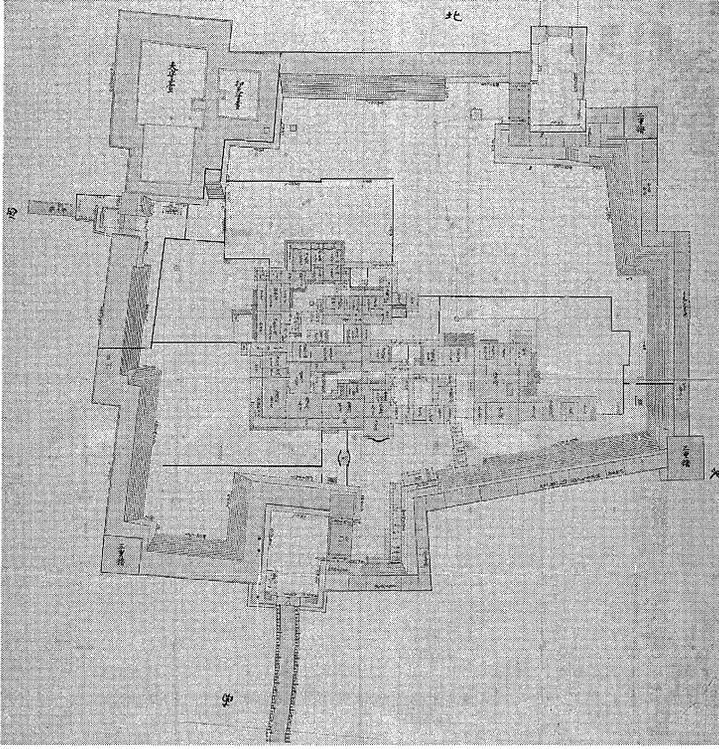


図10 「福井城本丸御建物図」(1370)

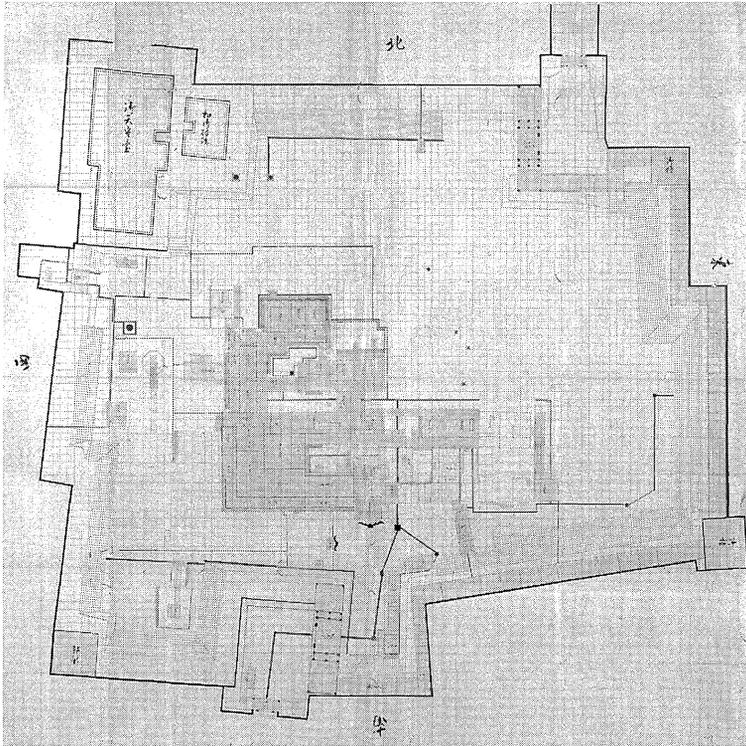


図11 「御本丸御絵図 文政六」(1362-1)

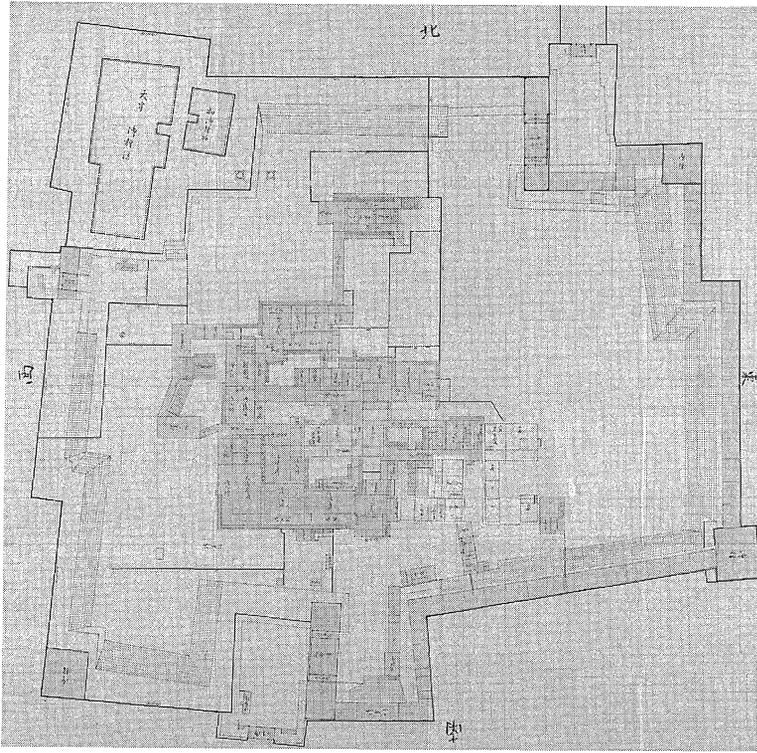


図 12 「越前福井御本丸御建物図」 (1372)

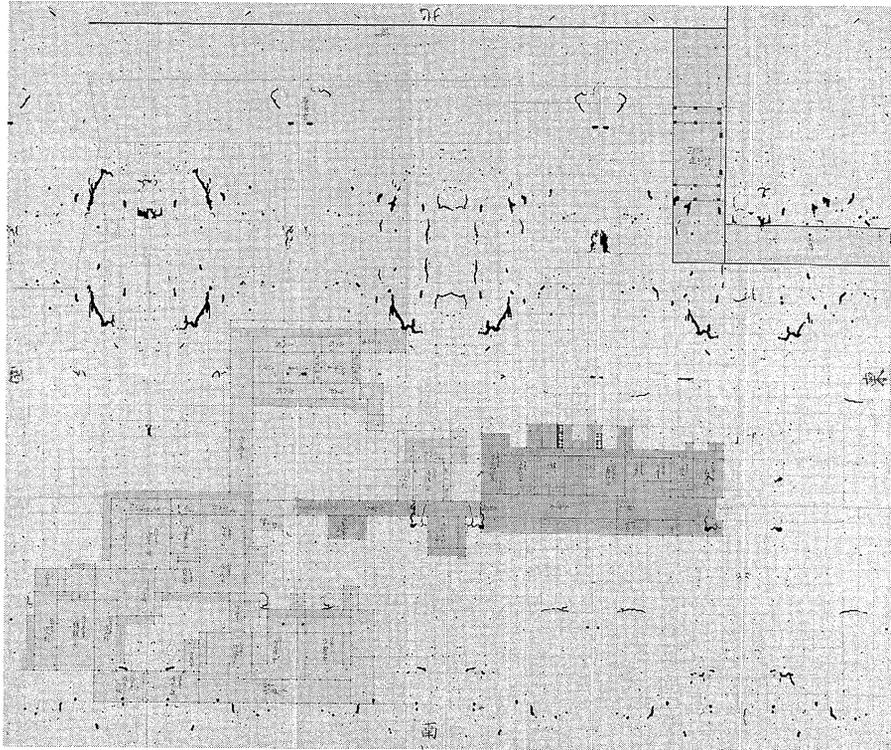


図 13 「御本丸御絵図御用部屋 御奥之図」 (1366)

国京 福井城本丸指図の年代について ―文政から嘉永期まで―

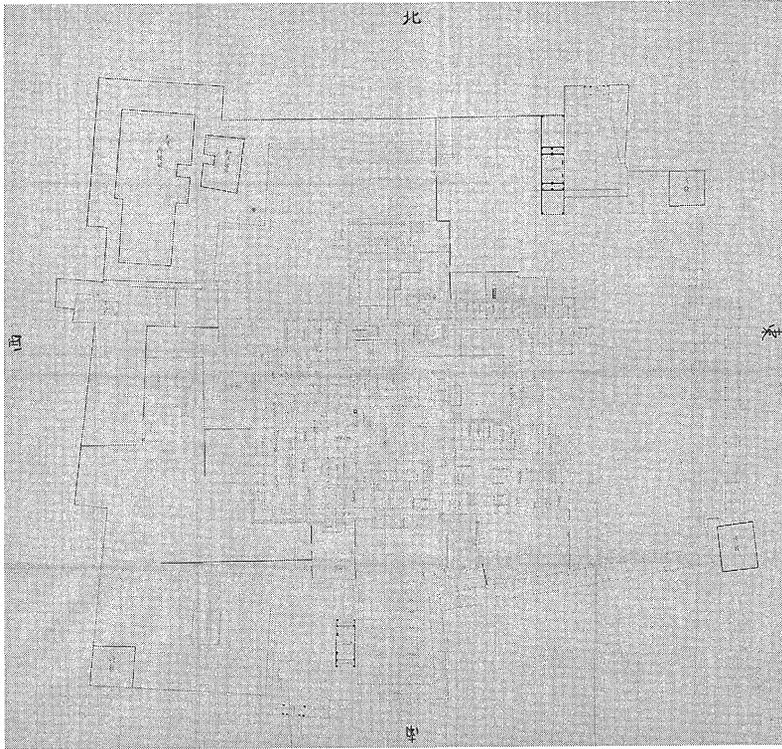
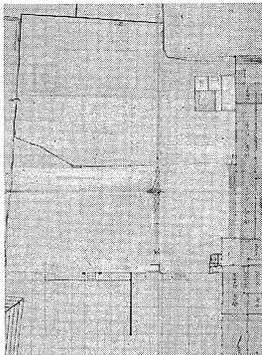


図 14 「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(1364)



掛紙下の透けて見える御宮・能舞台など（その下にも稽古所などがある）

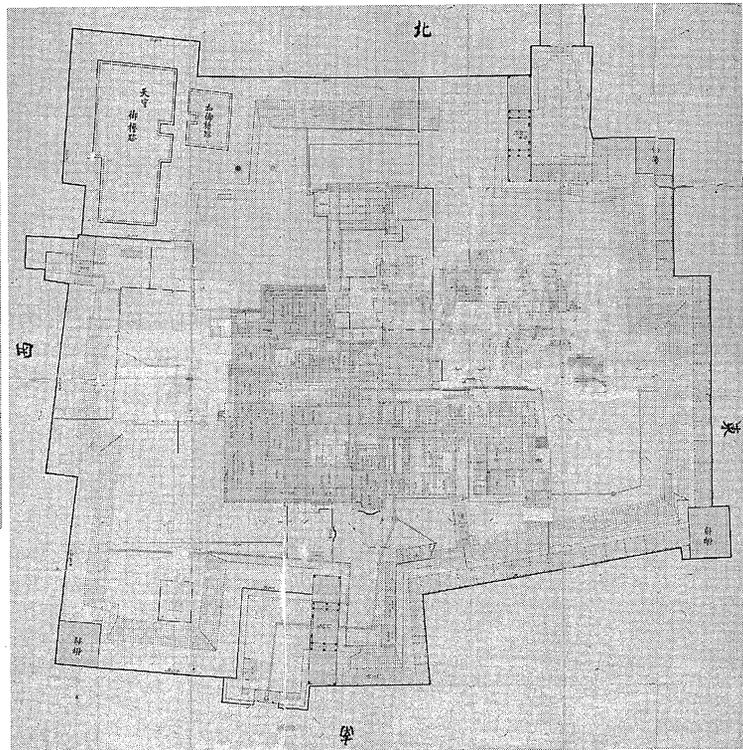


図 15 「本丸指図」(1363)



図 16 「御本丸御殿ノ図」 (1371)

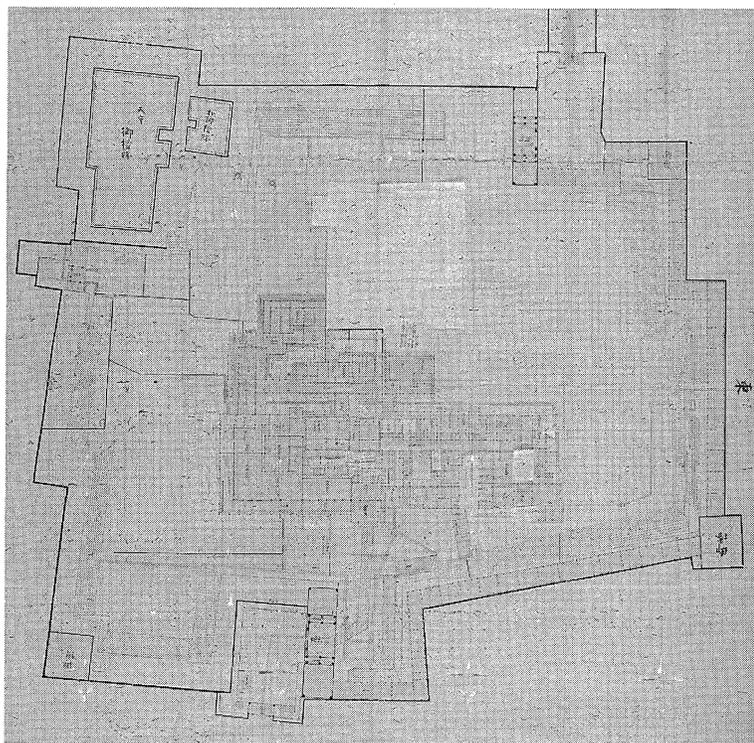
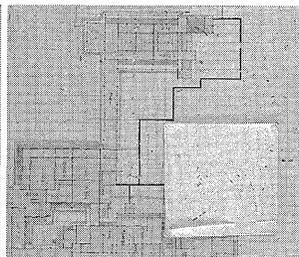


図 17 「御本丸御殿ノ図 嘉永元年」 (1365)



掛紙下の御小座敷

える。さらに後述のように天保六年以降とみられる「御本丸御殿ノ図」(二三七)で奥御小座敷と大奥御座之間を仕切った二重矩折れの板塀が、嘉永元年とされる「御本丸御絵図」(二三六五)でも変わらないのに本図では直線となっている。奥御座敷の御次之間・二之間の東や奥詰所、御用部屋・御右筆部屋南側の諸室の平面が「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)や嘉永元年とされる「御本丸御絵図」(二三六五)とも異なる。

一方、中奥西側の能舞台の位置と形状、台所南東隅に張り出した瓦方役所・小普請詰所が、後述のように天保六年以降の本丸の様子を描いたとみられる「御本丸御殿ノ図」(二三七)に一致する。しかし、御座所の本丸移転後の「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)にはいずれの部分も見当たらない。本図には、掛紙が表御殿東の長囲炉裏、中之口および表小姓、そして台所の三ヶ所に糊付けされる。これら三ヶ所はすべて階段をともない「二階」あるいは「二階家」と記載がある。この部分をそれぞれ御右筆部屋・御小道具・奥納戸、御腰物部屋・表納戸、近習部

屋としている。このことから、この図の掛紙は二階を表現するために張られたと見られる。これらのうち中之口および表小姓の二階、台所の二階が御腰物部屋・表納戸、近習部屋として同じく掛紙がされている図が、後述の表題に「文政六癸未歲 六月吉日改正」とある「御本丸御絵図」(二三六二)である。以上から文政十三年の西三ノ丸御座所から本丸へ移徙のための計画図であると推定される。

(4) 「御本丸御絵図 御用部屋(御奥之図)」

(二三六六) 図13

本図は、表題「御本丸御絵図」に加えて「但御奥之図 御用部屋」と別字体で書かれた袋に入れられる。薄い和紙に五分計の篋引きに朱罫線をひき、中奥の韃鞮之間や焼火御間東の奥御座敷・御小座敷・大奥御座之間そして北不明門を黄、大奥建物を桃に塗り分ける。建物内は朱罫線はひかれない。「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)と比較し、大奥御座之間の廁は御座之間の北東に設けられて御神前が見当たらず、入側は西入側と北入側に分離され、縁側と土縁が短手に

回る平面となる。これは実際に建てられた大奥御座之間と異なっている。さらに御小座敷と、奥御座敷との建物取り付きがやや西側に寄っている。また、御小座敷西側に張り出しがみられず、御休息に床の間と違棚が設けられるが、その東側に押入がみられない。御小座敷の南北両側に設けた縁側と土縁の境に柱がみられない。しかし、奥御座敷の御座之間・御休息之間や韃鞮之間・御家老部屋などの諸室の平面が文政六年の「御本丸御絵図」(二三六二)とほぼ一致している。以上より文政十三年の西三ノ丸御座所から本丸に藩主住居を移す際の計画図とみられる。

(5) 「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」

(二三六四) 図14

表題の文字は別紙に書かれて図面裏に張られ、字体は整理番号とは異なる。本図は厚手和紙に四分の篋描き線をひき、本丸石垣や建物平面が描かれる。表御殿東の長囲炉裏、中之口および表小姓の部屋に掛紙がなされ、二階の平面が描かれる。「福井城本丸御建物図」(二三七〇)の建物に加えて、奥御座敷の北側に

藩主の常住場所となる御小座敷、その東側に大奥御座の間をはじめとする大奥、中奥から東に続く用人や右筆部屋が増築され、さらにその東に御風呂屋などの諸建物も増築される。中奥の韃靼之間北側に射小屋、西側に稽古所、さらにその西に御宮・宗源堂・御佛殿（御持仏）などが西三ノ丸御座所から移築されている。「越前世譜」によれば、御宮の遷宮は文政十三年（天保元年）四月十九日、御小座敷など本丸の増築建物の完成は五月六日とある。<sup>21</sup> さらに同年九月十七日には大奥で男子が誕生した既述があり、大奥もその時までには完成していたことが確認できる。<sup>22</sup> このことから、文政十三年には本丸の建物はすべて完成したと考えられる。「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」の表題は、前述のように別紙に書かれたものが張り付けられていること、さらに「天保二年改正」ではなく「天保二年出来」としていることを考えると、後世の図面整理時に誤って記入したものと推測される。御小座敷・大奥御座之間の平面を見る限り、床の間の柱や建具が一部しか描かれていないが、その他の柱は細かく描かれており、信頼性の

高い図面と考えられる。

(6) 「御本丸指図」(二三六三) 図15

表題部には「文政十三寅年改正 御本丸指図」と「第壹番ノ内五号」が張り付けられる。「第壹番ノ内五号」は、「文政十三寅年改正 御本丸指図」の上に張られ、字体が楷書であるから後年の図面整理時に張られたものとみられる。「文政十三寅年改正 御本丸指図」は、やはり指図裏面に別紙を張り付けて表題としている。この紙の左には別の紙を張り付けていた痕跡が認められる。本図は五分計の朱罫線を本丸内全体に引き、建物を薄茶と黄井戸と排水路を薄青で彩色する。薄茶は色の剥げた部分から、黄の上さらに薄茶を塗り重ねたようにも見える。黄は文政十三年に西三ノ丸御座所から本丸へ藩主住居が移徙した時に新たに建てられた建物、薄茶は既存の建物である。柱や建具が詳細に描かれた図面である。図面全体の至る所に掛紙が二重に張られた部分やそれを剥がした痕跡がみられ、長期間にわたって利用されていたようである。『松平文庫福井藩史料目録』では、文政十三

年御本丸住居増しの計画図で、その後二度の改築を掛紙で改正した図とある。

本図を詳細にみると、韃靼之間の西側では一番上の薄い白紙の掛紙によって宗源堂・御宮・能舞台（拝見所・泉屋・舞台）・稽古所などが隠され、その白紙上に厩がさらに張り付けられる。その下にある五分計の朱罫線の掛紙では当初図に描かれた稽古所（射小屋の存在も微かにみえる）や御宮・拝殿・宗源堂・御供所を取り囲む塀の東の一部を隠し、能舞台（舞台・泉屋・拝見所・橋掛り）と稽古所・奥御座敷から直接拝見所に至る渡廊下に増改築される様子が描かれる。この改築される部分は黄で彩色され、既存建物とは明らかに異なる。<sup>23</sup> この能舞台・稽古所などは後述の天保六年以降と推定される「御本丸御殿ノ図」(二三七二)に増築された部分として描かれる能舞台・稽古所などに詳細を除きほぼ一致する。最下層の本図に描かれた東塀などは「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)とほぼ同じとなる。南西の乾櫓下にある御佛殿に白い掛紙が張られている。

これ以外のところでは掛紙が剥がされて当初

に描かれた図が見える部分では、中奥の御鉄炮之間・韃靼之間の東に配置される御用部屋・御右筆部屋の諸室平面も「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)とほぼ同じとなる。相違点は、御小道具部屋北の部屋が三畳から四畳に増築されていること、御内御右筆部屋の間仕切位置が異なること、塀がさらに細かく設けられていることなどである。

一方、奥の御小座敷では御休息は八畳のままで、改造以前の「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)とまったく同じ平面となっている。なお、御小座敷の御休息東にある床の間を含む幅二間部分に掛紙の痕が残る。これは「御本丸御殿ノ図」(二三七二)に示された御休息が八畳から十畳に大きくされた様子を計画あるいは変更した状態を示すものと見られる。

本丸北東の大奥部分でも掛紙が二回張られる。一番上の掛紙はほとんど残っていないが、五分計の朱罫線が引かれ、その範囲は糊痕から台所北側の長局をはじめとする大奥や御風呂屋付近である。この掛紙は厚く、下層の掛紙の図や、さらにその下の当初の図は透けて

みえない。後述の「御本丸御絵図 嘉永元月」(二三六五)の掛紙がない状態に最上層の掛紙の図は、ほぼ一致する。なお、一部に朱罫線が擦り切れたような所もみられ、さらに掛紙が張ってあった可能性もある。

最上層の下にある掛紙も所々しか残っていない。罫線はみられず、建物を薄褐に塗って描き、その部分のみを張り付ける。この掛紙も厚く、当初の図は掛紙から透けてみえない。

後述の天保六年以降の図とみられる「御本丸御殿ノ図」(二三七二)で増築された部分と表記される大奥や台所の北にある御風呂屋の東の御用人・御用部屋(広敷用人関係)と、その西にある御賄方部屋・御締部屋、大奥の南で東西に長く延びた幅一間半の廊下の一部などが描かれる。さらに掛紙の下の当初図では、「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)の規模の小さな大奥・御風呂屋さらにはこれと大奥を結ぶ幅一間の廊下が矩折れに描かれる。

台所部では朱罫線のみられない掛紙によって台所東や南東隅の増築計画を行なう。なお、台所北東隅の料理方などの位置が「天保二卯

年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)とは異なり、「御本丸御殿ノ図」(二三七二)に一致する。

既述のように、中奥の韃靼之間西側に廁が増築される様子が一番上の掛紙によって示される。この様子は「本丸建物図」(二三七七)にみえ、この図には文久頃に計画したと思われる大名妻子の帰国にともなう建物がみえる。このことからこの掛紙は文久頃に張られたと推定される。

以上から本図は「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)以降で、掛紙によって後述の「御本丸御殿ノ図」(二三七二)の建物の増築計画を加え、さらに文久頃に大名妻子の帰国にともなう中奥の改築を計画した図と考えられる。御小座敷・大奥御座之間の平面を見る限り、柱が細かく描かれており、「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)より信頼性の高い図面と考えられる。

(7) 「御本丸御殿ノ図」(二三七二) 図16

「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」(二三六四)の後におこなわれた本丸の増改築を色

分けした図である。赤は既存部分で、薄茶が増築部分、紫が住居替え部分（改造部分）、薄黄が井戸および水道と表記される。中奥の韃靼之間西側にあつた稽古所が能舞台を中心とする諸施設に大きく改築される。奥の御小座敷は御休息の東にある床の間や押入を半間東に移動して八畳から十畳に改築される。それにもない御休息の南北両側の縁側に設けられた戸袋は、いづれも建物西側に移動される。この御休息の八畳から十畳への改造は前述のように瑞源寺本堂の梁組や柱の痕跡からも確認でき、ほぼ図面通りに増改築されたことがわかる。大奥が大きく拡張されて部屋数が大幅に増加し、東西方向に長い幅一間半の廊下も増築される。それにもない広敷用人関係の部屋が御風呂屋東に移設されている。大奥の長局に、薄桃に塗られた平面が描かれる白い掛紙が張られる。この図は物置と裏部屋のみで、御小座敷側の北窓に目隠しを設けるので、二階の図と判断できる。

天保三年五月の後書をもつ「御本丸御間所座配図」<sup>26</sup>に記録される天保六年の稽古所は、「天保二卯年出来御本丸御住居中之図」のま

まであるから、能舞台・稽古所があるこの図は天保六年以降の本丸の様子を描いたものと考えられる。大奥に関する諸建物が大々的に増築されていることから、生母あるいは側室などの本丸への本格的な住居移転を考えた改造後を描いた図とみられる。

(8) 「御本丸御絵図 嘉永元年」(二三五)

図17

表題の「嘉永元年申歳 十二月吉日改正」は図の裏に直接書かれ、左下に字体の異なる小さな字で「当時入用」と記入される。本図では五分計の朱罫線が建物や石垣を除く本丸内にひかれ、建物が黄、排水路が薄青に塗られる。掛紙を張る部分が四ヶ所あり、第一は薄い紙に朱線で一階平面が描かれる台所部分、第二は五分計の薄い朱罫線に二階を詳細に描く長囲炉裏、第三は罫線のない薄い紙に廁・建出を描く正面の唐門付近、第四は白の掛紙で覆われる御小座敷部分である。朱線引きの台所は小部屋がなくなり、土間が大半となる。この他に糊の剥がれた掛紙が一枚あり、台所の二階が描かれ、薄い朱罫線のない図で、長

囲炉裏の二階と同様に詳細に描かれる。

本図には本丸西側にあつた御宮・宗源堂・御佛殿・能舞台・稽古所などは描かれない。大奥御座の間をはじめとした長局・御広敷関係建物・御風呂屋なども描かれない。図には掛紙の他に付箋が付けられ、「此所様張替」あるいは「此所一間中障子敷イ鴨居入椽張替」などがあり、簡単な改修工事の内容が記される。このことから作図後に、本丸建物の営繕工事のために使われていたことがわかる。

白い掛紙で覆われた御小座敷は、御休息を十畳に改造した後の平面である。御小座敷は万延元年五月から七月にかけて瑞源寺へ本堂とするために移築されている。このことからこの図は嘉永元年に作成され、その後改変のあつた部分を掛紙で修正して使用された図と考えられる。

なお、御小座敷縁側の戸袋の位置が前述の「御本丸御殿ノ図」(二三七)と異なる。この様子は図の描き方がよく似ている「本丸指図」(二三三)と同一で、戸袋が移動されずに「御本丸御殿ノ図」(二三七)が間違っているとも考えられる。しかし、瑞源寺本堂の修復調査



の際に、戸袋部材を利用したとみられる南下屋の柱部材から「北西向」との墨書が発見された。「北西向」とは「御本丸御殿ノ図」(二三七)の御小座敷の北西にある大きな戸袋と一致し、本図とは一致しない。このことから「御本丸御絵図 嘉永元年」(二三六五)が間違っていると考えられ、描き方のよく似た「本丸指図」(二三六三)をそのまま写したことが考えられる。<sup>27)</sup>

## 六、図面相互の比較と作図時期

前節では文政六年から嘉永元年までの本丸指図八点を、藩主住居が西三ノ丸御座所から本丸に移徙し、さらに再び本丸から西三ノ丸御座所へ移徙することに着目し、この移徙にともなう移築・増築・新築・改修された建物がそれぞれの指図でどのように描かれるかを比較し、その後指図の前後関係や計画図であるか実施図であるかを検討してきた。この検討結果を指図が当初描かれた年代順に、建物や部屋の有無などをまとめたものが表1である。このように従前から考えられている本丸指図の年代と内容は、一部変更する必要

があることが明らかとなった。最後に、本稿の執筆に際して松平文庫の閲覧・撮影には松平宗紀氏、福井県立図書館松井一代さんにご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

### 注

- (1) 松岡利郎「福井城本丸御殿について」(一)『若越郷土研究』二十三巻五号(一三三三)昭和五十三年十月、「福井城本丸御殿について」(二)『二十三巻六号(一三三三)』昭和五十三年十一月
- (2) 『松平文庫福井藩史料目録』平成元年 福井県立図書館
- (3) 平井 聖監修、吉田純一編集『城郭・侍屋敷古図集成 福井城・金沢城』至文堂 平成九年九月
- (4) 『国事叢記』、『片疊記』、『続片疊記』、『越藩史略』など
- (5) 本堂は平成十九年十一月〜二十一年三月、書院は同二十一年六月〜二十二年三月
- (6) 福井藩の藩主の代数については、近年松平光長を入れ、一代繰り下げるものもあるが、従前の表記に従った。
- (7) 瑞源寺蔵「瑞源寺記録」。現在、記録はなく、大正九年に写された越前資料所収の複写本による。
- (8) 書院の移築時期については資料がなく不明である。しかし、本丸指図上での大奥御座間の記載の有無と、その指図製作年との検討からこのように推定している。
- (9) 福井県文書館資料叢書五「越前松平家譜 慶永二 平成二十二年三月 五四頁 弘化元年九月十五日条。
- (10) 前掲(9) 七九頁 弘化二年七月十四日条。
- (11) 前掲(8)
- (12) 前掲(7)
- (13) 詳細については後日刊行される(仮称)瑞源寺本堂・書院修理工事報告書 参照。
- (14) 文政十三年の藩主住居の本丸への移転については、『片疊記・続片疊記上』福井県立図書館郷土誌懇談会共編 福井県立図書館昭和三十年八〇五頁〜八〇九頁による。また、後日刊行される『瑞源寺誌』を参照。
- (15) 本丸の完成は文政十三年で、完成時の図であれば天保二年は誤りである。詳細は後述のこの図の検討による。
- (16) 松平文庫 福井県立図書館保管「御座所絵図」一三八三
- (17) 前掲(14) 六二九頁二、御半知之節御座所御住居に相成候に付、大御番御番士御本丸御座所向所え半分宛御番相勤候」、六二九頁「被仰出侍中困窮に候間、御本丸御番人被中止三の丸(御座所之事也)に御番人勤可仕旨被仰出候」
- (18) 『続片疊記中』福井県立図書館郷土誌懇談

会共編 福井県立図書館昭和三十一年 三二頁  
 四一頁

(19) 図面には一部に糊痕状のものもあったが、他の掛紙の糊付けのような線状に長い痕ではないので、糊痕とはしなかった。

(20) 松平文庫 福井県立図書館保管「越前世譜」  
 文政十三年四月十九日条。

(21) 前掲(20) 「越前世譜」 文政十三年五月六日条。

(22) 前掲(20) 「越前世譜」 文政十三年九月十七日条。なお、男子は邦之助といい、十一月十四日死亡し、同十八日蓮正寺に葬られた。

(23) ただし、既存部分との取り合い部の掛紙の色はどちらとも言えない色となる。また、掛紙にはいりきらない建物は直接当初図に描いている。

(24) 稽古所・御射小屋などは掛紙を外すことができないので、平面を確認することはできなかった。

(25) 松平文庫 福井県立図書館保管「本丸建物図」一三七七

(26) 松平文庫 福井県立図書館保管「御本丸御間所座配図」六八五

(27) 鉄炮之間の西縁側の長さやそれに続く戸袋の描き方も同じで、本図では西縁側に張り紙をして訂正している。